「奈文研ニュース」の発刊

「奈文研ニュース」の発刊に当たり一言ご挨拶申し上げます。

所長　町田　章

奈良国立文化財研究所は文化財を保護するための調査研究機関として昭和27年に設立され、平成13年3月まで設立目的に向かって研究業務を推進して、数々の成果を上げてきました。平成13年4月からは独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所として、再出発の船出をいたしました。組織形態が変わっても、国民の財産としての文化財が存在する限り研究所の業務が基本的に変わることはありえず、これまで以上に文化財に関する研究を深めると同時に成果が広く国民生活に還元することが求められております。今回の改革にあたり行政改革の主旨に沿って、研究業務の合理的、文化財情報の公開、研究活動の国際化などを目標とする新しい組織に変更してみました。「奈文研ニュース」の発刊も新しい試みの一つであり、紙面を通して奈良文化財研究所の動きを逐一正確に発信したいと考えておりますので、読者諸氏からの忌憚のないご意見をお寄せいただければ幸いです。

「文化遺産研究部」の新設

4月1日の独立行政法人文化財研究所の発足に伴い、奈良文化財研究所に「文化遺産研究部」が新しく創設されました。「建造物研究室」「歴史研究室」という従来から研究活動を続けている2室に、庭園史や全国の遺跡整備の方法などを調査研究する「遺跡研究室」を新しく加えて統合し、3室でのスタート。スタッフは、部長1名に各室2名の計7名（建造物研究室には、別に奈良県教委からの出向者1名）です。

文化遺産研究部は、部としての歴史は新しくても、奈文研の中でも最も古い伝統を持つ建造物と歴史の両研究室を中核にもつので、両室が50年近く培ってきた経験は貴重です。これまでの調査研究の豊富な蓄積に、新部発足という新鮮味を加え、研究所の新しい「顔」となれるよう、スタッフ一同、決意を新たにしているところです。

皆様の暖かいご支援をお願いする次第です。

（文化遺産研究部）

発掘調査の概要

（平城地区）

興福寺中金堂の調査

4月に冬現場班から引き継いでから、はや2ヶ月を経なんとしている興福寺中金堂発掘調査も、いよいよ佳境に入ってきました。

基壇下では、複雑に展開する防災工事配管・土坑・焼け土・整地土との格闘にほぼめどがつき、いよいよ中門・回廊の調査でも見つかっている「玉石敷き」が顔をのぞかせ始めました。また、残っていた基壇の地覆石も外しましたが、その真下の、ほぼまったく同じ位置で凝灰岩が見えつ隠れつしています。基壇規模は創建時から変わっていない可能性が強まってきました。

変わらないものがある一方で、変わるものもあります。南面階段は、1間幅の独立した階段が3基並んでいた時期、それらがつながって5間の階段となっていた時期、それが縮小されて3間になった時期の少なくとも3期の変遷があ

興福寺中金堂発掘現場

ることがほぼ明らかになってきました。基壇に張り付いて残った階段の積み土の状況、巨大な凝灰岩、地覆抜き取り痕跡等々、証拠は着々と積み上げられてきています。

一方基壇上では、地覆石痕跡や石に残された火災の痕跡などから、須弥壇の規模がかつては現状より大きく、前に出ていたのではないかと想定されつつあります。

予定された終了まであと1月余り。独法化最初の、そして平城調査部久々の4人現場班による、1300年の歴史を誇る、日本史上有数の巨大寺院・興福寺との悪戦苦闘は続く。

（平城宮跡発掘調査部）

（飛鳥藤原地区）

藤原京左京七条一坊西南坪の調査

昭和40年代に建てられた市営住宅の建て替えに伴う調査で4月3日から開始しました。厚さ1m余りの盛土と旧耕作土などを重機で掘削。一週間を要しました。今回は調査の前半段階として、坪の中心を含む約2000㎡について行い、その終了後（7～9月）土盛地とした部分の調査を進める予定。現状（5月末段階）で判明している遺構は次の通りです。

大型東西棟建物1棟：桁行8間以上（約22m）、梁行2間（約6m）。建物の中心が坪を東西に二分する中軸線に揃うことから坪の中心建物（正殿）かその前の前殿と期待しましたが、調査区内には、他に大きな建物がありません。右京七条一坊西南坪のような一つの坪に整然と建物を配置した利用形態にはないようです。建物は七世紀前半の遺物を含む整地土上に建ち、それに見合う掘立柱建物も数棟あります。

大型建物の東・北方は一段低い「谷・沼」状を呈します。北東約200mにある低丘陵との間の谷地形に立地していますが、古代にそれをどのように利用していたかが課題となります。

砂層の上に粘土層が堆積し、その間の木質層には多量の木簡が含まれています。「池か？」

木質層の土をすべて整理室に持ち帰り水洗いして、木簡と「削り屑」の判読を続けています。これまでのところ「＊＊宮」「＊＊省」の文字がみえるが、他に多様な内容があり、木簡群や遺跡の性格をめぐって、多方面からの検討をしばらく続けなければなりません。

6月初めには航空写真測量。末日には「現地説明会」を予定しています。

橿原市城殿町における農業用倉庫建設に伴う調査

倉庫の建設予定地が、藤原京七条大路と西三坊大路の交差点で、本薬師寺の寺域を仕切る大垣の北西隅想定地にあたっていることから、約54㎡の調査区を設けて、5月14日～18日に調査をおこなった。想定通り、一辺1.2mの大柱穴5基を検出。逆L字形に連接することから、これが寺域北西隅の大垣と判明した。また、T字形に連接する東西・南北の幅広い溝があるものの、それが七条大路南側溝・西三坊大路東側溝であるには、大垣の北・西に位置するはずで、なお検討が必要であろう。

このほか、4月～5月には、明日香村飛鳥－石神遺跡での農業用水路の改修に伴う調査（30㎡）を行い、1989年に調査した石組溝の延長部分を確認しています。なお、水路は遺構を破壊しない工法で施工されました。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部）

今年度の発掘調査予定

（平城地区）

興福寺中金堂の調査

興福寺境内第一期整備事業に伴う調査を、昨年度の1月から継続して夏までの予定で行っています。調査面積は約1800㎡。中金堂の基壇が大部分の礎石とともに創建以来基本的に踏襲され続けてきたことや、階段・基壇外装・周囲の石敷の変遷、明治期に掘り出された国宝鎮壇具が置かれていた場所などが明らかになりつつあります。

興福寺旧一乗院跡の調査

奈良地方裁判所庁舎建て替えに伴う調査で、6月から9月にかけて実施する予定です。面積約765㎡。宸殿からその北側の池庭にかけての庭園中枢部分の解明が期待されます。なお、当調査予定地に一部重複する形で掘られた昭和38年の調査では、三彩をはじめとした貴重な遺物類が出土し、国の重要文化財に指定されています。

長屋王邸の調査

平城京左京三条二坊二坪における店舗建築に伴う調査。面積約210㎡。7月実施予定。未発掘であった長屋王邸内郭西南部分の調査で、邸宅の全貌がさらにわかってくることが期待されます。

大乗院庭園の調査

財団法人日本ナショナルトラストによる整備と平行して行っている継続調査を本年度は秋に予定しています。ここ1,2年で明らかになりだした西小池部分のさらなる解明と、大池西岸の復原データを得ることが求められます。

平城宮跡の調査

本年は平城宮第二次朝集殿院地区1800㎡の調査を予定しています。南門を含む範囲で、表土掘削

の開始は秋のうちには始める予定ですが、本格化するのは来年に入ってからでしょう。

興福寺回廊の調査

この夏までの調査成果を受けて、中金堂院の回廊部分についても、来年早々に調査する予定です。これまで調査の及んでいない西面回廊をあけます。調査面積は狭いものとなるでしょう。

（平城宮跡発掘調査部）

（飛鳥藤原地区）

藤原京左京七条一坊西南坪の調査

橿原市営住宅建設工事に伴う事前調査。敷地約5000㎡について、4月から6月、7月から9月の二度にわけて調査する予定。場所は藤原宮に南接した東西大路（六条大路）と宮中央正面の南北大路（朱雀大路）に面した「一等地」にあたります。立地からして、正史に名を残す「有名人」の邸宅跡発見が期待されます。

石神遺跡の調査

1986年から行ってきた調査の継続。昨年度の第13次調査で検出した掘立柱塀と石組大溝からなる遺跡の北限施設の東延長部分を追求する学術調査。対象約600㎡。7月から9月。

藤原宮大極殿院東回廊地区の調査

昨年まで行ってきた大極殿・朝堂院地区の調査をより内側に展開。昭和10年代の日本古文化研究所の調査の再検討でもあります。対象約2000㎡。10月から来年3月までの予定。

藤原宮南面大垣・内堀・外堀の調査

近世溜池高所寺池の改修工事に伴う事前調査。高所寺池改修工事に伴う調査は昨年からの継続。今年は堤北辺～東辺北半について。対象約2000㎡。10月から来年1月までの予定。

藤原宮東方官衙地区の調査

橿原市道拡張と河川改修に伴う事前調査。調査予定面積160㎡。10月調査予定。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部）

文化財関係研修の実施

埋蔵文化財担当事務職員一般研修

『埋蔵文化財基礎課程』終了

新世紀になって、平成13年度研修事業の第一弾として、5月8日から5月16日の日程で、事務職員を対象とした基礎研修をおこないました。

研修生は、北は北海道から南は熊本県にいたる総勢21名の参加でした。

研修の内容は、先ず遺跡保存と文化財保護法について力点をおいた話を踏まえ、発掘調査の経営、実際、保存整備の現状、遺構、遺物の保存科学的処理法、出土遺物の整理法から報告書作成にいたるまでの個別事例を交えて、講義が進められました。

アンケート調査の結果、概ね好評であったが、遺跡保存と文化財保護法についての講義は特に人気がありました。

また、飛鳥・藤原地域の遺跡保存整備状況を各自自転車で訪ね、発掘調査から保存整備状況を実感できたのも好評でしたが、見学箇所が少し多すぎて消化しきれない研修生もいたようです。今後の検討課題としたい。

（埋蔵文化財センター）

秋篠宮同妃両殿下奈文研視察

お出迎えを受ける両殿下

秋篠宮同妃両殿下は5月21日（月）、奈良文化財研究所を訪問され、渡邊理事長、町田所長、長谷川文化庁文化財部長のお出迎えの後、平城京の説明や、年輪年代法に代表される木材の年代測定法などの説明を受けられました。

両殿下はまず、平城宮跡資料館にお入りになり、町田所長から古代の奈良の様子について説明を受けられました。

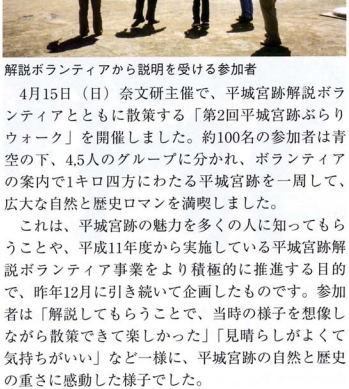
その後、樹木の年輪による年代測定法の研究が行われている埋蔵文化財センター古環境研究室では、

平城宮跡資料館で説明を受けられる両殿下

光谷室長から年輪年代法の内容や計測方法などが説明され、殿下は興味深く説明を受けられていた様子でした。

（管理課）

第2回平城宮跡ぶらりウォーク開催



解説ボランティアから説明を受ける参加者

4月15日（日）奈文研主催で、平城宮跡解説ボランティアとともに散策する「第2回平城宮跡ぶらりウォーク」を開催しました。約100名の参加者は青空の下、4,5人のグループに分かれ、ボランティアの案内で1キロ四方にわたる平城宮跡を一周して、広大な自然と歴史ロマンを満喫しました。

これは、平城宮跡の魅力を多くの人に知ってもらうことや、平成11年度から実施している平城宮跡解説ボランティア事業をより積極的に推進する目的で、昨年12月に引き続いて企画したものです。参加者は「解説してもらうことで、当時の様子を想像しながら散策できて楽しかった」「見晴らしがよくて気持ちがいい」など一様に、平城宮跡の自然と歴史の重さに感動した様子でした。

次回は秋に開催しますので、9月頃に参加者の募集をする予定です。

（文化財情報課）

文化財情報の公開及び見学情報

（飛鳥資料館）

春期特別展「遺跡を探る」

・会期　5月15日～7月1日

・開館時間　9：00～16：30（入館は16：00まで）

地中に埋もれた遺跡の有無、あるいはその大きさや性格を、掘り起こすことなしに推定することは、遺跡の保護、調査に携わる者にとっては、基本的な作業といえます。学術的調査を行おうとするにしても、土地開発に対応する事前調査を計画するにしても、まず地下の遺跡を把握する必要があるからです。このために、研究者が、対象となる土地の上をくまなく歩き回って、特徴的な地形や、地表に散った遺物の破片の分布などを調べるとか、崖面や掘削工事であらわれた地層を観察するといったやり方が行われてきました。

物理機器を用いた地中探査は、こうした従来の遺跡確認の手法を補い、さらに確実なものとする手段として研究がすすめられ、実際に応用されるようになったものです。探査の結果は発掘調査地区を設定したり、発掘の期間や費用の目安をたてたりするのに役立ちます。今回の特展では、普通は目にすることのない、大地比抵抗測定装置、磁気探査機、地中レーダーなどの遺跡探査機器の実物を展示、その作動原理を解説するとともに、写真やパネルやグラフを用いて様々な遺跡への実際の応用例を展示します。地中探査技術と考古学のかかわりに、いささかでも興味と関心とをもっていただければ幸いです。

電気探査

（第88回公開講演会）

・日時　6月16日（土）13：30～

・場所　平城宮跡資料館講堂

・定員　先着200名

「復原された東院庭園隅楼」箱崎和久

「よみがえる浄土世界－阿弥陀浄土院の発掘－」清野孝之

※聴講無料

（現地説明会）

○興福寺中金堂発掘調査

・日時　6月17日（日）13：30～

・場所　奈良市登大路町興福寺境内

○藤原京左京七条一坊西南坪（橿原市営住宅建設）発掘調査

・日時　6月30日（土）13：30～

・場所　橿原市上飛騨町

（平城宮跡のボランティア解説（無料））

国の特別史跡である平城宮跡をボランティアが解説します。

平城宮跡資料館や遺構展示館、復原された東院庭園、朱雀門など見どころ満載、ぜひ平城宮跡の壮大な歴史に触れてみて下さい。

（各施設休館日（月曜、（月曜が祭日の場合はその翌日））

・備考　団体（20名以上）は事前に申し込んでください。
申込先：文化財情報課（内線208，219）

研究室紹介

毎回2研究室を順次紹介していきます。

建造物研究室（文化遺産研究部）

これまで孤立していたかのような建造物研究室は、この4月に新しい組織になって生まれた文化遺産研究部に所属する三つの研究室のひとつとなりました。現在のところ人に移動はなく、研究のめざすところや役割も以前から定まっていて変化はありません。けれども取り組み方には変化があります。独立行政法人化にあたり5ヶ年の研究計画と予算計画をたて、この目標にそって活動することになったのです。

5ヶ年計画に挙げた研究は大きく分けてふたつあります。

ひとつは、古代から近世に至る伝統建築、集落・町並み、近代建築、近代化遺産など、歴史的建造物全般の基礎調査とその保存修復についてであります。とくにこの5ヶ年の間に、これまで続けられてきたわが国の歴史的建造物保存修復の考え方や手法を明治期までさかのぼって探り、これからの保存に活かすために分析してその結果をまとめることにしています。

もうひとつは、文化庁が奈文研から替わって直接おこなう平城宮第一次大極殿および大極殿院の復原事業に対する学術面の指導・助言、さらにはそれらの基盤となる古代建築の総合研究です。復原事業はまさにこれからが本番で、設計や施工段階での細部の研究から復原の具体的な方針にいたる検討などの場面では、これまで研究をおこないながら復原事業をすすめてきた奈文研の研究者の参加がますます必要となります。

五分の一構造模型による復原第一次大極殿の検討

建造物研究室はこのような研究を活かし、地方自治体が実施する建造物の基礎調査、集落・町並み調査、近代化遺産の調査などに参加するとともに、建造物の保存修復事業や遺跡の建造物復原事業にも関わっています。

研究室は技官2名と奈良県から文化財修理技師を迎えた3名体制ですが、他の部局の5名と韓国から受け入れた研究員1名を加え、全部で9名が建築関係研究者として活動しています。

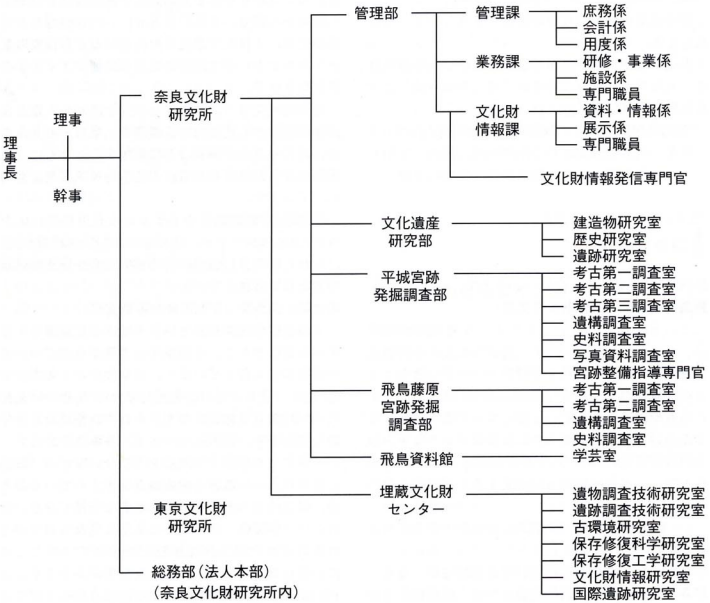
考古第一調査室（平城宮跡発掘調査部）

平城宮跡発掘調査部では、平城宮の発掘調査をすすめるだけでなく、平城京内の宅地や寺院についての発掘調査も行っています。本年度から、考古研究部門3室、建築・庭園研究部門で1室、文献史研究部門1室の5調査室体制になり、それぞれ整理研究を分担しています。各調査室つまり、各専門分野のメンバーがチームを組んで知恵を出し合いながら、議論しながら一つの遺跡の発掘調査をすすめていくことが、創立以来の当研究所の基本的な精神であり、世にいう「学際的」な研究をはるかに先取りしてつくりあげられた調査研究体制を継承しているところに、奈良文化財研究所の大きな特色があります。これによりこれまでにさまざまな成果を積み上げてきていることを忘れてはなりません。

発掘調査では様々な遺物が掘り出されるが、瓦と土器を除いたさまざまな出土品の整理、研究を担当しているのが考古第一調査室です。木を使って作られた実に多様な木製品、砥石、石器、宝玉類などの石製品、銭貨、鏡、帯金具などの銅製品、鎌や鋤や刀の刃あるいは釘、かすがいなどの鉄製品、樹木、草本、種子などの植物遺体、馬、牛などの骨などなど、往時の生活文化のありようを明らかにする鍵となるさまざまなモノを研究対象としています。このような多種多様な遺物を取り扱っていることから、整理、分析をすすめるには幅広い知識が要求されることになります。現在研究員は室長以下4人のメンバーであり、また遺物の洗浄からはじまり、コンピューターを駆使した膨大な質量のデータ整理にいたるまで、頼もしき4人の女性陣の支援を受けながら調査研究が続けられています。

独立行政法人文化財研究所　奈良文化財研究所組織図

（平成13年4月1日現在）



編集室から

これまで文化庁の施設等機関であった奈良国立文化財研究所と東京国立文化財研究所とが統合され、平成13年4月1日から独立行政法人文化財研究所として新たなスタートを切りました。また、機関名は「国立」の名称がはずれ「奈良文化財研究所」となりましたが、略称は「奈文研」とこれまでどおり変わりませんので、ご愛顧の程よろしくお願いします。

また、独立行政法人化に伴って、組織改革や事務・事業の見直しが図られました。今回創刊となる「奈文研ニュース」も、積極的に文化財情報を提供する手段の一つとして、新たに発行することになりました。奈文研の研究活動や公開事業等の情報を、ホームページでも発信していますが、更にこの紙面を通じて皆さんにお伝えして行きます。

なお、第1号の発行が当初の予定よりも遅れたため、事前情報が事後になっている記事もありますが、ご容赦いただきたい。

奈文研ニュース編集室
（文化財情報課内　内線204，208）